

「白居易の生涯」

山居 閑人

トップページ

<http://sankyokanjin2.jp/>

白居易は、日本文学に対して最大の影響を与えた詩人です。それは、「白氏文集」が白居易自身の手で編纂されて遣唐使により日本にもたらされたのに対し、杜甫や李白の詩集が編纂されたのは後代であり、日本にもたらされるのが遅かったこともありすが、それにも増して「長恨歌」を始めとする白居易の華麗な詩風が平安貴族の好みに合っていたことによるものでしょう。

このたび「白居易の生涯」と題しまして、その生涯と日本文学への影響を紹介したいと思います。

白居易は、安史の乱の余波がまだ残っている772年に河南省新鄭市で生まれました。李白の没後約十年、杜甫の没後約二年後のことでした。早熟の秀才で5〜6歳の時、既に詩を作ることができ、15歳頃、科挙の為の勉強を始め、16歳の時友人の送別会において「古原の草を臥し得て送別す」と言う詩を作りました。

白居易は、この年に長安に赴き、時の大詩人である顧況を尋ねました。顧況は「居易」という字を見て、「長安の米は高くて居易くはないぞ。」と言いましたが、「古原の草を臥し得て送別す」の最初の四句を見て驚嘆し、「これほどの語を用いることができれば、居易いであろう。前言は冗談だ。」と言ったとされています。この詩は、白居易の出世作とされ、今でも白居易の墓の前の石碑に刻まれております。

「古原の草を臥し得て送別す」を紹介いたします。

離離原上草

離々たり原上の草

一歳一枯榮 一歳に一たび枯榮す

野火焼不盡 野火焼けども尽きず

春風吹又生 春風吹きて又生ず

遠芳侵古道 遠芳古道を侵かし

晴翠接荒城 晴翠荒城に接す

又送王孫去 又王孫の去るを送れば

萋萋滿別情 萋萋として別情滿つ

白居易は、既にこの前年、江南地方にいたときに「江南にて北客を送り因りて憑んで徐州の兄弟に書を寄す」と言う詩を作りました。詩題のごとく、故郷の地に行く人を送り、手紙を届けてもらうことを頼んだときのものです。この詩に、「早熟の詩人」とされる白居易の片鱗が表れています。

故園望斷欲何如 故園望断して何如せんと欲す

楚水吳山萬里餘 楚水吳山万里の余

今日因君訪兄弟 今日君に因って兄弟を訪う

數行鄉淚一封書 數行の郷淚 一封の書

王昭君は漢の後宮にあった絶世の美女でしたが、時の皇帝は高級の女達の絵を描かせ、それを見てお召しになる者を決めていました。そのため、後宮の女は絵師に賄賂を送って自分の姿を美しく書かせましたが、王昭君は賄賂を送らなかつたので、絵師はその姿を醜

く書きました。当時は友好国であった匈奴の王である单于せんうが漢を訪れ、後宮の女の一人を自分の妻として迎えたいと申し出ました。

時の皇帝は、醜い女を与えようとして王昭君を指名しました。单于に引き合わせるときに、皇帝は王昭君が絶世の美女であることに気付きましたが、既に遅く、王昭君は单于の妻として匈奴きょうじの地に送られそこで生涯を終えました。

この話は広く伝えられ、李白を始め多くの詩人が、王昭君を詠った詩を作っております。居易は、17歳の時、悲劇の美女とされる王昭君を詠った二首の詩を作りました。そのうちの一首を紹介いたします。この詩は、王昭君が匈奴の地を訪れた漢の使いに対して、「いつが黄金で自分の身を買戻して欲しい。自分の美貌がかってより衰えたなどと伝えないで欲しい。」と言ったと想像して作られています。

漢使卻回憑寄語

漢使かんし 却回きやくかいするとき 憑りて語を寄す

黄金何日贖蛾眉

黄金いすず 何れの日か 蛾眉がびを贖あがなうと

君王若問妾顔色

君王くんおう 若し妾しやうが顔色がんしよくを問わば

莫道不如宮裏時

道いう莫なかれ 宮裏きゆうりの時に如しかずと

白居易は、28歳のとき、科挙の受験のため長安に赴き、翌年最初の試験で、たった17人しか合格できなかった試験に、最年少で合格することができました。白居易の家は下層階級に当たり、もし、合格にも家柄が考慮された盛唐の時代に生まれたら、科挙には合格できなかったと言われています。

三年後に高級官僚の試験にも合格し、エリートコースとしての道を歩き始めましたが、合格者の中に、生涯の親友となった元槿げんじんがいました。

この年に、白居易の最大名作と言われる「長恨歌ちやうこんか」を作り、「長恨歌の楽天らくてん」ともてはやされました。「長恨歌」は、七言百二十句に及ぶ華麗な詩ですが、その最後の部分を紹介いたします。殺されて仙女となった楊貴妃が、玄宗の使いの道士に対し、玄宗に伝えるように言った言葉が綴られています。「比翼ひよくの鳥とり」「連理れんりの枝えだ」という言葉は、この部分から生まれました。

臨別殷勤重寄詞

別れに臨んで殷勤に重ねて詞を寄す

詞中有誓兩心知

詞中に誓い有り 兩心のみ知る

七月七日長生殿

七月七日 長生殿

夜半無人私語時

夜半 人無く 私語の時

在天願作比翼鳥

天に在りては 願わくは比翼の鳥と作り

在地願爲連理枝

地に在りては 願はくは連理の枝と為ならん

天長地久有時盡

天長 地久 時有りて尽つくるとも

此恨綿綿無絕期

此の恨みは綿々として絶ゆる期無からん

「長恨歌」は、源氏物語を始めとする平安文学に多大の影響をもたらしましたが、その中の句「春宵苦短く日高くして起く」を句題として藤原高遠が作った和歌、「三千の寵愛 一身に在り」を句題として源道済が作った和歌、「春風桃李 花開く日」を句代として藤原高遠が作った和歌、
「秋雨梧桐 葉落つる時」を句代として藤原高遠が作った和歌を
紹介いたします。

朝日さす玉のうてなも暮れにけり 人と寝る夜のあかぬなごりに (藤原高遠)

ももしきの君が朝寝 (あさい) の移り香はしみにけらしな妹が狭衣 (源道済)

春風に多みをひらくる花の色は昔の人の面影ぞする (藤原高遠)

木の葉散る時につけてぞなかなかに我が身のあきはまづ知られける (藤原高遠)

しかし、白居易は、その後は「新樂府」「秦中吟」に集約される社会批判の詩を作り、そ

の中でも「売炭翁」ばいたんおうち「新豊の臂を折る翁」しんほうのひじをおきななどが有名です。白居易はこのころから、自分の作った詩を老婆に読んで聞かせ、分かるまで易しくするように推敲したとされ、白居易の詩は「老嫗能解」ろうおのうのかいとされて親しみやすい物となっています。

この頃作られた名作に、「王十八の山に帰るを送り、仙遊寺に寄題す」せんゆうじにきだいがあります。この詩の頸聯は特に有名で、平家物語の「紅葉」に引用されています。この詩を紹介いたします。

曾於太白峰前住

かつ たいはくほうぜん
曾て太白峰前に於いて住み

數到仙遊寺裏來

しば ゆうせんじり
數しば仙遊寺裏に到りて來る

黑水澄時潭底出

こくすい たんてい
黒水澄む時 潭底出で

白雲破處洞門開

はくうん どうもん
白雲破るる処 洞門開く

林間暖酒燒紅葉

りんかん た
林間に酒を暖めて紅葉を燒き

石上題詩掃綠苔

せきじょう だい りよくたい
石上に詩を題して綠苔を掃う

惆悵舊遊無復到

ちようしょう きゆうゆうま
惆悵す 旧遊復た到ること無きを

菊花時節羨君回

きくか じせつ かねがえ うらや
菊花の時節 君が回るを羨む

この詩の頸聯は、また、多くの和歌に引用されております。このうち、藤原定家の詠んだ和歌、藤原良経が詠んだ和歌を紹介いたします。

林あれて秋のなさけも人とはず紅葉をたきしあとの白雪（藤原定家）

木この下もとにつもる落葉をかきつめて露あたたむる秋のさかづき（藤原良経）

この頃から、白居易は寺院を訪ねることが多かつたらしく「雲居寺に遊び穆三十六地主に贈る」という詩を作っています。山深いところを散歩する喜びは、「山は山を愛する人の物だ」という語に表れています。

亂峰深處雲居路

らんほう 深き処 雲居の路

共蹋花行獨惜春

共に花を踏みて行き独り春を惜しむ

勝地本來無定主

しょうち 勝地は本来 定主無し

大都山屬愛山人

おおむね 大都 山は属す山を愛する人に

白居易の親友であった元槿は、真面目な人間であり不正をあばくことが多かつたため、逆に恨みを買ひ、江稜の地に左遷されました。このとき、白居易は翰林院に務めていましたが、元槿のことを思いやり、宿直の夜「八月十五日夜 禁中に独り直し 月に対して元九を憶う」という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

銀台金闕夕沈沈

ぎんたい 金闕 夕沈々

独宿相思在翰林

あいおも 独宿 相思うて翰林に在り

三五夜中新月色

さんごやちゆう 三五夜中 新月の色

二千里外故人心

にせんりがい 二千里外 故人の心

渚宮東面煙波冷

しよきゆう 渚宮の東面には煙波冷かに

浴殿西頭鐘漏深

浴殿よくでんの西頭せいとうには鐘漏しょうろう深し

猶恐清光不同見

猶恐なおおそる清光せいこう 同じくは見ざらんことを

江陵卑湿足秋陰

江陵かうりょうは卑湿ひしつにして秋陰しゅういん足る

この詩の領聯「三五夜中 新月の色 二千里外 故人の心」の対句は有名で、和漢朗詠集に採録されており、源氏物語に引用されているほか、多数の和歌に影響を与えています。

これらのうち、藤原俊成が詠んだ和歌と、藤原定家が詠んだ和歌を紹介いたします。

月きよみ千里の外に雲つきて都のかたに衣うつなり（藤原俊成）

ふす床をてらす月にやたぐへけむ 千里のほかをはかる心は（藤原定家）

白居易は、40歳の時に母を失い、この頃から仏教への帰依心が急激に高まっていきました。このとき作られた「墓立」を紹介いたします。一面に散った花びらのうえに満ち渡る蝉の音が読経のように聞こえていたのでしょうか。これにより、秋の悲しさが一層引き立っています。

黄昏独立仏堂前

黄昏こうこん ひとり 仏堂ぶつどうの前

满地槐花満樹蟬

地に満つる槐花かいか 樹きに満つる蟬

大抵四時心総苦

大抵たいでい 四時しじ 心総しんそう 苦す

就中腸断是秋天

就中なかんづく 腸断ちやうだん するは 是れ秋しゅうてん天

「墓立」の転句と結句は、和漢朗詠集に採録され、源氏物語に引用されているほか、多

数の和歌に引用されております。藤原良経の詠んだ和歌、藤原定家が詠んだ和歌を紹介いたします。

おしなべて思ひしことのかずかずに猶色まさる秋の夕ぐれ (藤原良経)

さくら花山ほととぎす雪はあれど思ひをかぎる秋は来にけり (藤原定家)

このころ、白居易は、都を離れて過ごす村の夜景を「村夜」という詩に詠いました。ひっそりとした中に美しさを感じさせる詩です。この詩を紹介いたします。

霜草蒼蒼蟲切切
霜草蒼々として 虫切切

村南村北行人絶
村南 村北 行人絶ゆ

獨出前門望野田
ひとり 門前に出でて 野田を望めば

月明蕎麥花如雪
月明らかにして 蕎麥花雪の如し

このころの白居易の作品に「秋夕」があります。妻と別れて暮らす秋の昨夜と独り寝の寂しさを歌った物です。「秋夕」を紹介いたします。

葉聲落如雨
葉の声は 落つること 雨の如く

月色白似霜
月の色は 白きこと 霜に似たり

夜深方獨臥
夜深ふけて 方に独り臥す

誰爲拂塵牀
誰が為に 塵の牀を払わん

この詩を、平安貴族達は、「聞怨詩」と受け止め、様々な和歌を作りました。慈円の詠んだ和歌を、藤原定家の詠んだ和歌を紹介いたします

夜もすがら月に霜おく楨の屋にふるか木の葉も袖ぬらすらむ（慈円）

こゑばかり木の葉の雨は古郷の庭もまがきも月の初霜（藤原定家）

喪が明けて都に戻った白居易は、皇太子のお守り役となりましたが、暗殺事件の犯人を捕まえるのを早く行うように進言したため、その一味から憎まれ、「新樂府」「秦中吟」で政治を批判したことも問題とされ、江州の司馬として左遷されました。白居易が受けた初めての挫折であり、その後の人生観に大きな影響を与えました。

慌ただしい旅立ちと、京を離れる苦痛から遅々として進まぬ足取りを「初めて官を貶され望秦嶺を過ぐ」と言う詩に詠っております。望秦嶺は、長安の南方にある秦嶺山脈にある山で、長安を一望できる最後の山です。この詩を紹介いたします。

草草辭家憂後事

草々として家を辞して後事を憂い

遲遲去國問前途

遅々として国を去りて前途を問う

望秦嶺上迴頭立

望秦嶺上 頭を迴らせて立てば

無限秋風吹白鬢

無限の秋風白鬢を吹く

白居易が江州に向かう途中で作られた「白鷺」を紹介いたします。白居易の挫折感が表れています。

人生四十未全衰

人生四十 未だ全くは衰えず

我為愁多白髮垂

我は愁い多きが為に 白髪垂る

何故水辺双白鷺

何故に 水辺の双白鷺

無愁頭上亦垂糸 愁い無きも 頭上に亦た糸を垂る

江州こうしゅうに付いた白居易は新たに草堂そうどうを建てて、そこで過すごしました。左遷されてきた司馬には実際の仕事は与えられませんでした。江州の地は、曾かつて陶潜とうせんが隠棲した地に近く、白居易は、そこで、清少納言の故事で有名な詩「香爐峰下 新たに山居さんきよを卜し草堂 初めて成なりり偶たまた東壁とうへきに題だいす」を作り、これは自分にふさわしい地で、この地で一生を終えても良いという意を示しました。
しかし、この詩に表された白居易の心が強がりであったことは、後に作られた詩から明らかになっています。

日高睡足猶慵起 日高く 睡り足りて 猶お 起くるに慵し

小閣重衾不怕寒 小閣しょうかくに衾きんを重ねて 寒おそを怕おそれず

遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺いあいじの鐘は 枕そばだを 欹そばだてて聽きき

香爐峯雪撥簾看 香爐峰こうろほうの雪は 簾すだれを 撥かかけねて看みる

匡廬便是逃名地 匡廬きやうろは 便すなわち是これ 名なを逃にがるるの地

司馬仍爲送老官 司馬しばは仍なお 老おいを送るの官た爲り

心泰身寧是歸處 心やす泰やすく身やす寧やすきは 是これ 歸きする處ところ

故鄉何獨在長安 故鄉こきやう 何ひとぞ独ひとり 長安ちやんあんにのみ在あらんや

白居易が元稹げんしんが左遷されたとき、それを思いやる詩を作ったように、白居易の左遷を聞いた元稹は、重病の身でしたが、白居易の左遷を聞いて、それを思いやる詩を作りました。

この詩「楽天らくてんの江州司馬かうしゅうしを授けられしを聞く」という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

残灯無焰影憧憧

残灯ざんとう 焰ほのお 無なく 影えい 憧ちゆう 憧ちゆう

此夕聞君謫九江

此この夕ゆう 君きみが九江きゅうかうに謫たくせらるるを聞く

垂死病中驚坐起

垂死すいしの病中 驚おどいて坐起ざきすれば

暗風吹雨入寒窓

暗風あんふう 雨吹あめふいて 寒窓かんそうに入る

このころ、白居易は、雪の降りしきる夜の様子を「夜雪やせつ」という詩に表しました。静かな夜を詠った、味わい深い風景詩です。

已訝衾枕冷

已いに訝いぶか 衾枕きんちんの冷ひやややかなるを

復見窗戸明

復またた見る 窓戸そうこの明あらかなるを

夜深知雪重

夜深くして 雪の重おもきを知る

時聞折竹聲

時ときに聞く 折竹せつちくの聲

白居易は、この地で「長恨歌」と並び称される華麗な長編の詩である「琵琶行」を作りました。七言八十八句からなるこの詩は、元妓女で今は商人の妻となっている女性の琵琶の音に感動したことや、その女性から聞いた身の上話を綴ったものです。その最後の部分を紹介致します。

今夜聞君琵琶語

今夜 君の琵琶の語を聞くに

如聽仙樂耳暫明

仙樂せんがくを聴きくが如ごとく 耳暫しばらく明めいたり

莫辭更坐彈一曲

辞なかす 莫なれ更なかに坐まして一曲を弾ひくを

爲君翻作琵琶行

君が爲に翻して「琵琶行」を作らん

感我此言良久立

我が此の言に感じて良久しく立ち

卻坐促絃轉急

卻き座して絃を促ば絃轉急なり

淒淒不似向前聲

淒々として似ず向前の声に

滿座重聞皆掩泣

滿座重ねて聞くに皆泣を掩う

座中泣下誰最多

座中泣下ること誰か最も多き

江州司馬青衫濕

江州の司馬青衫濕う

江州の地で過ごすこと三年、白居易のもとに長安からの辞令が届きました。「長安に戻れる」と胸をときめかせて空けてみると、「忠州の刺史に任ずる」というものでした。刺史は長官であり、階級は上がり、実務にも就けることになりましたが、忠州は更に奥地でした。忠州に付いた白居易は、「江州にいたときは友達もなく家を出ることも殆どなかったが、忠州では人間らしい者に会えれば嬉しいくらいだ」と言う意味の詩を作っています。

忠州において、白居易は、名作「春江」を作りました。頸聯は『和漢朗詠集』にも採られていたほか、源氏物語にも引用されています。

また、頷聯については、嵯峨天皇が小野篁の詩才を試した話が、大江匡房の『江談抄』に載せられています。当時「白氏文集」は秘物とされ、嵯峨天皇だけが見ることができました。嵯峨天皇は、この詩の「空しく」を「遙かに」に変えて、自分の作であると言って小野篁に見せました。これを見た小野篁は、「良くできた詩でございませう。しかしながら、「遙かに」を「空しく」に変えると、更に良くなると思われませう。」と申し上げたところ、嵯峨天皇は驚いて、真相を打ち明け、「汝の詩才は白樂天に匹敵する。」と言ったと書かれています。「春江」を紹介いたします。

炎涼昏曉苦推遷

炎涼昏曉苦だ推遷し

不覺忠州已二年

覚えず 忠州 已に二年

閑閑只聽朝暮鼓

閑を閉ざして只だ聽く 朝暮の鼓

上樓空望往來船

樓に上りて空しく望む 往來の船

鶯聲誘引來花下

鶯聲に誘引せられて 花下に来たり

草色句留坐水邊

草色に句留せられて 水邊に坐す

唯有春江看未厭

唯だ春江の看れども 未だ厭かざる有り

縈砂繞石淥潺湲

砂を縈り石を繞りて 淥潺湲たり

「春江」の影響を受けた多数の和歌のうち、大江千里が詠んだもの、藤原定家が読んだものを紹介いたします。

鶯の鳴きつる声にさそはれて花のもとにぞ我は来にける（大江千里）

鶯の初音をまつにさそはれてはるけき野辺に千世も経ぬべし（藤原定家）

白居易は、忠州在任中に荒地を耕して、その地を東坡と名付け、その地に自分の手で木を植えてその成長を楽しみました。後に蘇軾が流罪中に同じ事を行い、自分の号を「東坡」としたのも、このことに由来します。

忠州在任二年にして、白居易は長安に呼び戻されることになりました。出発に際し、東坡に植えた木と別れる詩「東坡の花樹に別れる詩 兩絶」という二首の絶句を作りました。其の二を紹介いたします。この詩は、自分がいなくなっても、今までと同じように春の美しさを見せてくれ、新しく来る刺史は、花を愛する人でないとは限らないからと詠っています。

花林好住莫顛頌

花林好住して顛頌すること莫かれ

春至但知依舊春

春至れば但だ知れ旧に依つて春なるを

樓上明年新太守

樓上明年新太守

不妨還是愛花人

妨げず還た是れ花を愛する人なるを

このようにして長安に戻った白居易でしたが、中央では派閥抗争が続いており、此が嫌になつた白居易は、自ら地方に赴くことを願い出て、杭州と蘇州の刺史を歴任することになりました。風光明媚なこれらの地で、業務に励む傍ら、これらの自然を楽しみ、多くの詩を作りました。「春湖上に題す」もそのひとつです。西湖において作られたもので、西湖の美しい風景を述べ、杭州を離れられないのは、西湖であると結んでいます。「春湖上に題す」を紹介いたします。

湖上春來似畫圖

湖上に春來りて画図に似たり

亂峯圍繞水平鋪

亂峯圍繞して水平らかに鋪く

松排山面千重翠

松は山面に排して千重の翠

月點波心一顆珠

月は波心に点じて一顆の珠

碧毯線頭抽早稻

碧毯の線頭早稻を抽き

青羅裙帶展新蒲

青羅の裙帶新蒲を展ぐ

未能拋得杭州去

未だ杭州を拋ち得て去る能はず

一半勾留是此湖

一半の勾留是れ此の湖

この年、白居易は、西湖の泥を浚って堤を作り「白堤」と名付けて、桃と柳を植えて、西湖の風景をより美しいものとなりました。後に、白居易は白堤のことを追懐し、「江柳を想う」という詩を作っております。自ら植えた柳の下で、誰が今その枝を折っているのだろうか」と詠っています。この詩を紹介いたします。

曾栽楊柳江南岸

曾て栽えし楊柳 江南の岸

一別江南兩度春

一たび江南に別れてより 兩び春を度る

遙憶青青江岸上

遙かに憶う青々たる江岸の上

不知攀折是何人

知らず攀折するは 是れ何人なるかを

蘇州においても、白居易は風光の明媚さを詠った「正月三日間行」という詩を作りました。このころ、「花鳥風月」を美しく詠いあげる白居易の本領を發揮した詩が多く作られております。「正月三日間行」を紹介いたします。

黃鸝巷口鶯欲語

黃鸝巷口 鶯初めて語り

烏鵲河頭冰欲銷

烏鵲河頭 氷銷えんと欲す

綠浪東西南北水

綠浪 東西 南北の水

紅欄三百九十橋

紅欄 三百九十橋

鴛鴦蕩漾雙雙翅

鴛鴦蕩漾す 双々の翅

楊柳交加萬萬條

楊柳 交加す万々の条

藉問春風來早晚

藉問す 春風の来たること早晚

只從前日到今朝

只だ 前日より今朝に到る

蘇州滞在中、白居易は詩友の劉禹錫と揚州で出会いました。二人は、揚州の近くの大明寺の棲霊塔に上り、共に詩を作りました。二人は共に55才、九層の楼に登るのは大変だったようです。白居易が作った「夢特」と同じに棲霊塔に登る」と、劉禹錫が作った「樂天」と同じに棲霊塔に登る」を紹介いたします。なお「夢特」は劉禹錫の字、「樂天」は言うまでも無く白居易の字です。

半月悠悠在広陵

半月 悠々として広陵に在り

何楼何塔不同登

何れの楼 何れの塔 同に登らざらん

共憐筋力猶堪任

共に憐れむ 筋力の猶お任に堪え

上到棲霊第九層

上りて棲霊第九層に到れることを

歩歩相攜不覺難

歩々 相攜えれば 難きを覺えず

九層雲外倚闌干

九層の雲外 闌干に倚よる

忽然笑語半天上

忽然として笑語す 半天の上

無限遊人舉眼看

無限の遊人 眼を挙げて看る

蘇州刺史を辞任し中央に戻った白居易は、法務次官を持って実質上の役所勤めを止め、

皇太子付きの名誉職となって、王維に倣って半隠半官の生活を送り、多くの時間を洛陽の香

香山寺さんざんじの近で過ごし、自ら「香山居士こうざんこじ」と称しました。気楽な生活の中で作られたのが「酒に
対す」五首で、其の二が特に有名です。また、其の四からは、王維の「元二げんじの安西あんせいに使い
るを送る」が、既に「陽関三疊ようかんさんじょう」と呼ばれ重返体で詠われていたことが分かります。
人生は、火打ち石から出る火花のように短い時間しかない。そこでは、大いに酒を飲んで
楽しもうと詠った「其の二」を紹介いたします。

蝸牛角上争何事

蝸牛角上かぎゅうかくじょう 何事をか争う

石火光中寄此身

石火光中せつかこうちゅう この身を寄す

随富随貧且歡樂

富ひんに随い貧しほらに随い 且かんらくく歡樂せん

不開口笑是痴人

口を開いて笑わざるは 是ちじんれ痴人

「酒に対す其の二」は、和歌にも影響を与えております。このうち、藤原俊成ふじわらしゅんせいが詠んだ
和歌、花山院師兼かざんいんしげかねが詠んだ和歌を紹介いたします。

石をうつ光の中によそふなりこの身の程をなに歎くらん(藤原俊成)

はかなしや見る程もなき石の火の光のうちによする此の身は(花山院師兼)

このころの白居易の、気楽で満足した生活を詠った詩四首を紹介いたします。最初に「香
山寺さんじに暑を避く」を紹介いたします。清々しい香山寺の夏の様子が綺麗に描写されています。

六月灘声如猛雨

六月たんせい 灘声 猛雨の如し

香山楼北暢師房

香山こうざんの楼北ろうほく暢師ちやうしの房ぼう

夜深起凭闌干立

夜深やふくして起おちて闌干らんかんに凭よりて立てば

滿耳潺湲滿面涼

耳みみに滿みつる潺湲せんかん面めんに滿みつる涼りよう

次に、「春風」を紹介いたします。長安の様子と香山寺近くの田園の様子を比較して描写しており、白居易の達観した考えが伺われます。

春風先發苑中梅

春風しゅんぷう先まづ発ひらく苑中えんちゆうの梅

櫻杏桃梨次第開

櫻杏おうきよう桃梨とうり次第じに開ひらく

薺花黄茱深村裏

薺花せい黄茱ゆきよう深村しんそんの裏うち

亦道春風爲我來

亦また道いう春風しゅんぷう我わが爲がに來くると

白居易は香山寺こうざんじの対岸にある竜門山りゅうもんざんを訪れました。竜門の石窟で現在の観光名所の一つです。そこで「竜門山下の作」という詩を作りました。無駄な役人生活に労力を使うことなく、山水や詩作を楽しもうという隠逸の心が現れております。この詩を紹介いたします。

龍門澗下濯塵纒

龍門澗りゅうもんかん下か濯じん塵えい纒あら

擬作閒人過此生

閒人かんじんと作なつて此この生を過ごさんと擬ぎす

筋力不將諸處用

筋力きんりきは將もつて諸處しよじよに用いはず

登山臨水詠詩行

山やまに登のぼり水みづに臨まみ詩うたを詠よじて行いかん

続きまして、閑適な生活を詠った「晩秋の閑居」を紹介いたします。訪れる客も稀であ

り、静かな生活を送っていたことが窺えます。

地僻門深少送迎

地は僻より門は深くして送迎少なり

披衣閑坐養幽情

衣を披きて閑坐し幽情を養う

秋庭不掃攜藤杖

秋庭掃わず藤杖に攜わりて

閑蹋梧桐黄葉行

閑に梧桐の黄葉を蹋んで行く

長寿を重ねるにつれ、元槿を始めとする友人達とは次々に幽明境を異にすることになりましたが、劉禹錫はまだ健在でした。このころの高官は、妓女を側に置き、身の周りの世話をさせたり、その芸能を楽しんだりしておりましたが、白居易は、二人の妓女を解放しました。このとき、妓女を柳の枝に例え、これまでの苦勞をねぎらうと共に、変な男に靡かないようにとの願いを「柳枝に別る」という詩に作りしました。この詩を紹介いたします。

両枝楊柳小楼中

両枝の楊柳 小楼の中

嫋娜多年伴醉翁

嫋娜として多年 醉に伴う

明日放帰帰去後

明日放ち帰すも帰り去りて後

世間応不要春風

世間に応に春風を要めざるべし

これを見た劉禹錫は、白居易の未練がましさをからかって、これに和した詩「楊柳詩詞」という詩を作って送りました。有名な「煬帝の行宮」で始まる「楊柳詩詞」とは別の作です。「解き放った妓女は、どこにいくやら分かったものではない。」と言う意味で、二人の軽妙なやりとりが表されております。

輕盈嫋娜占年華

輕盈嫋娜として年華を占む

舞榭妝樓處處遮

榭に舞い樓に妝い処々に遮る

春盡絮飛留不得

春尽き絮飛んで留め得ず

隨風好去落誰家

風に隨って好んで去り誰が家にか落つ

詩名高い白居易が尊敬した詩人は誰だったのでしょか。杜甫でも李白でもありません。それは「潯陽樓に題す」に示されるように、自然派と言われる陶潜と韋応物でした。この詩を紹介いたします。数多くの大詩人に尊敬された陶潜の偉大さは「知る人ぞ知る」の感があります。

常愛陶彭澤

常に愛す陶彭沢

文思何高玄

文思何ぞ高玄なる

又怪韋江州

又た怪しむ韋江州

詩情亦清閑

詩情亦た清閑なるを

今朝登此樓

今朝此の樓に登り

有以知其然

以て其の然るを知ること有り

大江寒見底

大江寒く底を見れば、

匡山青倚天

匡山青く天に倚る

深夜溢浦月

深夜溢浦の月、

平旦鐘峰煙

平旦鐘峰の煙

清輝與靈氣

清輝と靈氣と

日夕供文篇

日夕に文篇を供す

我無二人才

我に二人の才無し

孰爲來其間

孰か其の間に来ると為さん

因高偶成句

高きに因りて 偶句を成すも

俯仰媿江山

俯仰して 江山に愧づ

白居易は、71歳の時、法務長官の肩書きをもって致仕しました。かつて、杜甫の祖父が74歳になっても致仕しないことを批判して「70歳で致仕するのは礼法である」と詠ったことに遅れること一年、いささか晩節を汚した感がしなくてもありません。

74歳の時、白居易は知り合いの老人達を集め、自分達の長寿を祝う会を開き「尚齒会」と名付けました。このとき、集まった老人は9名でしたが、白居易は70歳に満たない二人を若造として、会には加えませんでした。「尚齒会」は3月21日に行われました。現在行われている「尚齒会」は、これに由来し、70歳以上をメンバーとし、3月に行うのが通例となっています。

白居易は、846年、75歳の時、自らの生活が幸せであったことを祝う「自ら老身を詠じ 諸々の家族に示す」という詩を作りました。「寿は七十五に及び 俸は五十千に霑う」で始まるこの詩が、白居易の遺作となりました。

この年の11月、白居易は天寿を全うしました。時の皇帝である宣宗は、宰相の官と従二品の位を追贈し、「白居易を弔す」という詩を送りました。官位は、詩人としては張九齡に次ぐものです。

宣帝が追贈した詩の紹介を最後に、『物語で楽しむ漢詩・和歌』『白居易の生涯』を終わります。やはり、白居易の代表作品は「長恨歌」と「琵琶行」であったと言えるでしょう。

綴玉聯珠六十年

綴玉連珠 六十年

誰教冥路作詩仙

誰か冥路をして 詩仙と作す

浮雲不繫名居易

浮雲繫げず 名は居易

造化無爲字樂天

造化無爲 字は樂天

童子解吟長恨曲

童子も解く吟ず長恨の曲

胡兒能唱琵琶篇

胡兒も能く唱う琵琶の篇

文章已滿行人耳

文章已に滿つ行人の耳

一度思卿一愴然

一度卿を思えば一に愴然

(令和元年9月23日作成)

参考文献等

『白楽天100選』石川忠久著、NHKライブラリー出版

『中国漢詩吟詠全集 絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版

ブログ「千人万首 資料編 和歌に影響を与えた漢詩文」

<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-yms/yamatouta/sennin/kansi.html#kansi>